

県境を超えた連携に期待「北関東インバウンドサミット」

今年までの3年間、栃木県内で展開されたJRグループの大型観光企画「栃木 destinations キャンペーン(DC)」。メインの18年は、観光客入り込み数が過去最高の9543万人に達した。だが、宿泊者数は前年比1%減の826万人と、長年の課題である伸び悩みは解消されなかった。

外国人の宿泊者数も前年からの伸びは1%に満たず、22万3000人とどまった。DC直前の16年から約6%増えてはいるが、訪日外国人全体の同じ期間の伸び率が30%に迫るのを考えれば、なんとも物足りない。世界遺産を抱える日光市で8.6%も減っていたのはショッキングでもあった。

原因として、活動拠点とする都内に日帰りしやすい立地が指摘されて久しい。こうした傾向に対し、同じ課題を抱える栃木、群馬、茨城、埼玉の北関東4県が連携して外国人誘客、宿泊を促進しようとする新たな動きが始まる。来年1月に本県で「北関東インバウンドサミット」が開かれる。

主催するのはインバウンド誘客事業などを手掛けるジャパン・ワールド・リンク社(栃木県壬生町)。各県の観光関係、行政などの参加者を見込む。

県境を越えた連携が実現すれば、都心と各観光地を往復する外国人観光客の動きを、各県間の移動に変え、宿泊を伴わせる期待も膨らむ。各県観光地を結ぶ鉄道事情は決してよくないが、同社の宮地アンガス社長は、訪日外国人の利用が急増しているレンタカーや高速バスなどの活用を頭に描く。

今回は、同じ課題について考えて交流を深め、将来に向けた土台を作るのが主目的。実施には広域にわたる事業者間調整や体制構築など課題も少なくない。今後の動向に注目したい。

旅行大手JTBの今年の調査では、訪日外国人の本県認知度は30%に満たず、都道府県ランクは42位に低迷する。群馬、茨城両県も同じ傾向だ。各県の魅力をいかに発信していくか。同時に考えなければならない。

下野新聞社論説室 論説委員長 鈴木 憲一



大修理を終え約4年ぶりに姿を現した国宝陽明門
＝2017年3月、日光市山内